



遠加具の
心
ばか
しし

はっかん
発刊にあたって

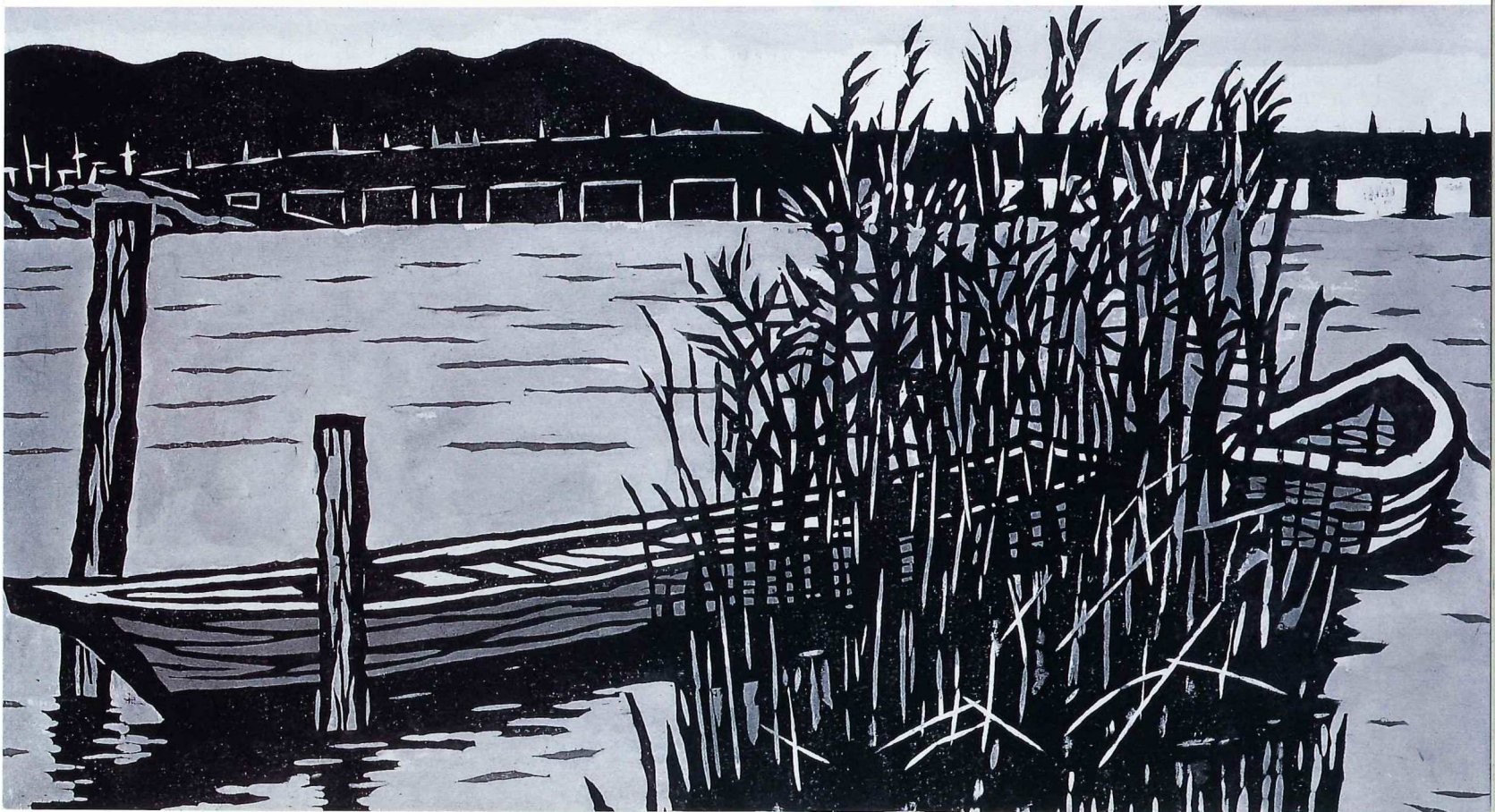
小・中学生の皆さんの、家庭や地域での遊びや体験学習の資料として、学校週5日制の始めにお配りした「わたしはみずの子 みどりの子」「ファミリーマップ」に続いて、この「いいつたえ ききつたえ」「遠賀のむかしばなし」の本を作りました。

むかしの子供たちが、秋の夜長や冬のこたつの中で、目を輝かせてお年よりや親たちから聞いた「郷土のむかし話」を集めてみました。

わたしたちのまち「おんが」の、水と緑と伝統が生み出し、あたたかく育てた「伝説」と、この中にこめられた人々の思いや心くばりを、このまちの将来を担う人たちが感じとり、文化の香り高く、明るく、楽しい「まちづくり」に生かしてほしいと願っております。

遠賀町教育委員会

教育長 時松 喜志男



むかしばなし絵地図



二話 目すすぎの井戸

十一話 日本さいごの鬼

十四話 鼻かげてんぐ

十話 おきよ地蔵

十五話 こぶの源助さん

三話 地蔵庵の由来

七話 一夜で咲いた菜の花畑

四話 神盗人

八話 千間川の河童

九話 今古賀の義人

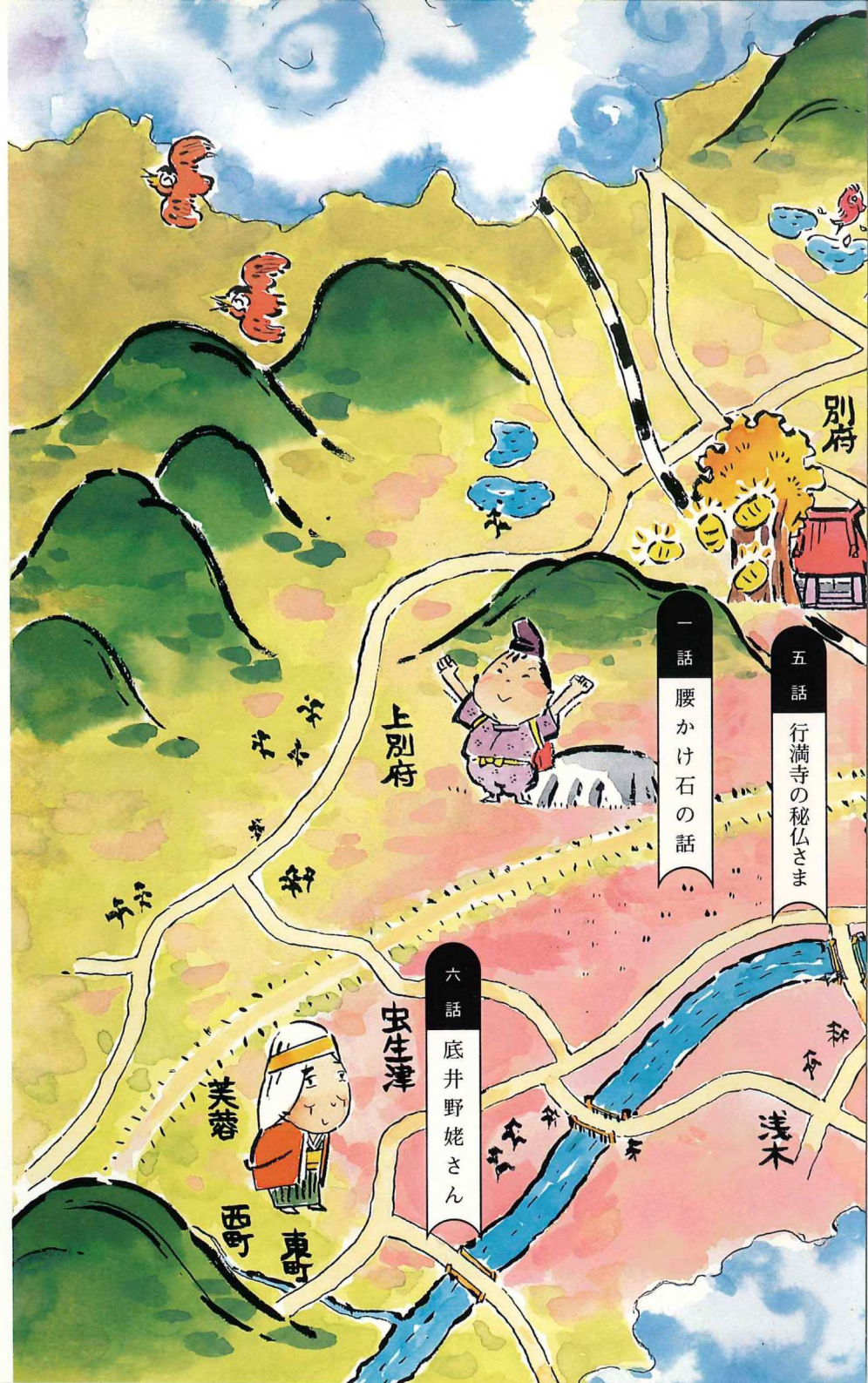
十三話 まてじい

十一話 竜神の淵

おんががわえき

遠賀のむかしばなしもくじ

発刊にあたって	1
遠賀のむかしばなし絵地図	2
●いいつたえ、ききつたえむかしばなし	
一話 腰かけ石の話	4
二話 目すすぎの井戸	6
三話 地藏庵の由来	8
四話 神盗人	10
五話 行満寺の秘仏さま	12
六話 底井野姥さん	14
七話 一夜で咲いた菜の花畑	16
八話 千間川の河童	18
九話 今古賀の義人	20
十話 おきよ地藏	22
十一話 竜神の淵	24
●かみしばいむかしばなし	
十二話 日本さいごの鬼	26
十三話 までじい	30
十四話 鼻かげ天狗	32
十五話 こぶの源助さん	36
あとがき	38



一話

腰かけ石の話

(上別府)

菅原道真が京都から筑紫の太宰府に流されて旅をする道すがら、あちらこちらでお泊りになったり、休憩されたりしたところがあり、それぞれに言い伝えが残されています。

たとえば椎田の海岸にある綱敷天満宮では、突然の旅人を迎えるので座布団が間に合いませんでした。それで綱をグルグルと巻いて座ついていたので、その名前ができたと言われております。

また、北九州市の戸畑にある菅原神社では、

「今晚一ばんだけでいいから、泊めて下さい。」と、たのんだのですが、「顔も知らん人を、泊める訳にはいかない。」と、言って一度は断わられました。何度も頼んだところ、「では仕方がない、朝、一番鶏が鳴くまででよいなら……」と、やっこのことで泊まることができました。ところが、あまり時もたつてないのに、急に鶏が鳴き出しました。やぐそくした事なので、仕方なく、出発しなければならなくなりました。実は、これは宿の人の計略であつ



歩いて見ようおはなしのふる里



菅公御遺蹟の碑と並んで置かれていた頃



今は、子供のひろばの真中に安置された腰かけの石



●公民館南の一段高い所にあったが、今は上別府公民館跡地に腰掛石は下されている。

て、鶏の首をしめて鳴かしたのでと言われています。

それから、北九州の若松の蓆屋では、凍てつく夜の寒さをしのぐために宿舎の戸口に蓆をかけたことから、蓆屋天神として名を残し今に伝えられています。このようにいろいろな苦労をしながら旅をつづけ、やつとの思いでここ遠賀の地にたどりつかれました。その時、余りにも疲れはてていた道真公は、ほとんど歩くこともできないくらいでした。そしてとうとう道の端の大きな石に腰をおろしてしまいました。

この様子を見た村の人たちは、水をくみお茶をわかつて心から接待をして道真公を慰めました。道真公も大へん喜ばれ、香炉や、和歌をかけた色紙などを村の人に下さったそうです。

また、近くに潮井掛けの松と呼ばれる古い松の木や庚申さまの塔などもあって、海の眺めも美しく旅の疲れをいやすにはちょうどよい場所だったのかも知れません。

ゆつくりと休まれて、元気をとりもどされた道真公は、また太宰府に向けて旅をつづけられました。後の世の人が、道真公をしたのでお宮を建ててお祀りしたのが今の高家天満宮です。このお宮は、太宰府と同じように、学問の神様であり、また地区を守る神様でもありましたので、遠賀地方の大切な守り神として、秋のお祭りには遠くからたくさんの人達がお参りに来ておりました。

境内の参道の両側には露店が並び、ガス燈の光りに照らされて、さまざまなお菓子やあめ玉などが売られ、子どもたちには楽しいものでした。お宮の横には、舞台もできて、賑やかな芝居もはじまり、大勢の人たちが夜の更けるのも忘れてお祭りに酔ったそうです。

なお、道真公の腰かけ石は、たたけば遠くまでその音が響いて、ただの石ではないと大切にされ、昭和二十九年上別府公民館を建設する時、上の段に移されました。毎年行なわれる天満宮の御神幸には、この石を御旅所として御神輿をおき、お祭りを行い昔をしのんでいます。その後、新しい公民館が小字高家にたてかえられたので、また腰かけの石はもとの位置に下され安置されています。

若松の北の端にある堂島のお薬師さまは、眼の病気にたいそう効きめがあるということで、近郷の人びとに知られていました。

近くの小高い丘の上に梶の大木にとり囲まれた大きなお屋敷がありました。梶の木はケヤキの古いい方で、近くの人たちは「つきのき屋敷」とか「長者屋敷」とかよんでいました。その長者に美しい一人の娘がありました。その娘が、ひどい眼病にかかって困っておりました。いろいろ手だてはつくしましたがよくなるどころかだんだん見えなくなっていくきました。

悲嘆にくれていた長者は、そんなある時、近くの村に眼病のお薬師さまがあると人づてに聞きました。

日頃から信心のないことで有名だった長者でしたが、薬をもすがら思いで、さっそく娘をつれてお参りにでかけ一心にお祈りしました。

そんなお参りが幾日か続いたある夜のこと、夢の中に一人の老人があらわれていました。

「私は堂島の薬師である。熱心に祈る姿に感心したので娘の眼をなおしてあげよう。薬師堂の西にある井戸の水で目をきれいに洗うとよい。」そういつて光と共に消えていきました。

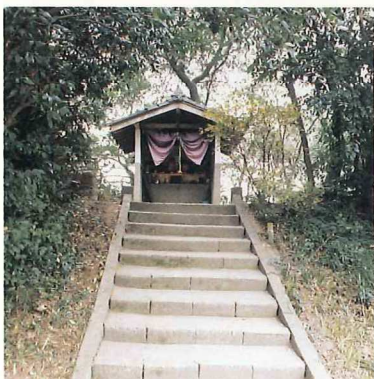
おどろいた長者は夜が明けのを待ちかねて、娘と一緒に夢の中のおつげの通り薬師堂のお参りをす



歩いて見ようおはなしのふる里



薬師堂の西を下りたところにある井戸



堂塔寺あとにある薬師堂



●島津橋より北へ150m、階段登って薬師堂の西を10m下りる。

ませ、すぐ側そばの井戸の水で目を洗いねいに洗いました。そして二日たった次の朝、両方の眼はすっかりきれいよくなっておりました。

娘は大そう喜こんで、お父さんの長者にいいました。

「お父さん、お願いがあります。あんなにひどかった私の目を治なおして下さい。どうぞ立派りっぱなお堂を造つくって下さい。」とたのみました。

まもなく、すばらしいお堂ができ上り、父娘は前にもまして熱心にお参りを続けたということです。

それから何年か経たった永禄二年、大友宗麟おともむねりんの乱らんで、お堂は焼け落ちてしまいましたが、夜になってお堂の焼け跡あとの方で、明るく光るものがあるので、村人たちが不思議ふしぎにおもって掘ほってみました。すると、キラキラとかがやくお薬師さまが出てきました。

やがて近くの栄宋寺えいそうじに安置あんちされたお薬師さまは、大勢の目の病いの人達の助けとなって近郷近在きんこうきんざいに広まっていきました。

そして、何年かたったある日、高瀬季国たかせすくにというお侍さむらいが、この人もひどい眼病で、いろいろつくしてもいっこうによくならないので困こまっていましたがお薬師さまの話聞いてはるばるやってきました。このお侍は三日三晩、お薬師さまに奉仕ほうしし、満願まんがんの朝がきて、ふと、何だか目の前が少し明るくなっていることに気がつきました。急いで「目洗めあらいの井戸いど」に行き、目をすすいでみますと、目はすっかりよくなっていました。

まぶしい朝の光りにかがやく木の葉の一枚一枚や、お寺の屋根瓦やねがらまでがはつきり見えるではありませんか。お侍は喜こんで小踊りこわどりしながら、お薬師さまに深く感謝したということです。

※このお話は若松の栄宋寺えいそうじの由来書ゆらいしょに書いてあり、高瀬季国というお侍の名は若松の小字名「末国すえくに」として残っています。また、目を洗った井戸は「目すすぎの井戸」として今も堂塔寺だとうじの北にあります。

三話

地蔵庵の由来

(松の本)

ある月の明るい、秋の夜のことでした。草むらからは、虫の鳴く声が聞こえておりました。

一光という京に住んでいる老人が長い間、故郷の松の本をはなれていきましたが、帰ることを思い立ったので旅の支度をしていました。

そこへ、知り合いのお坊様が筑前まで帰るといつて訪れ、「あなたも九州へお帰りですか。幸いに好い道連ですから、一緒にお願ひします。」と言われました。それで「わたしも一人旅のさびしさから救われますので、よろしくお頼みます。」と一光老人は答えました。

それで二人は、長い長い旅をいっしょに続けて、やっとの思いで故郷の松の本に帰り着きました。

「京からの道中は、いろいろとお世話になりました。ぜひ、私の家で落ち着いて、旅の疲れをいやしてください。」と、一光老人はお坊様に申しました。しかし、お坊様は、一光老人の別れがたい心はわかっているのですが、何かわけでもあるのでしょうか。どうしても、その話を聞き入れてはくれませんでした。

お坊様は、「ここでお別れするのは、心のこりですが、私の代わりに、ある仏様を残してまいります。」と静かにそう言って、立ち去っていかれました。



歩いて見ようおはなしのふる里



松風山延命庵



延命庵の地藏仏や地獄絵は有名



●小高い丘も三本の松も今はない

ところが、どこにも、仏様の像は、置かれては、いませんでした。その夜のこと、一光老人は不思議な夢を見ました。夢の中に仏様が現われて、「村の中ほどの小高い丘に三本の松があります。そこへおまつりしてください。」とおっしゃいました。一光老人は、何のことなのか、さっぱりわかりませんでした。しかし、お坊様の言葉を思い出し、気になりましたので、夜が明けるのを待って、三本松のある丘へ行ってみました。すると、どうでしょう。その松の木の根元に、今まで見たこともないような、きらきら光る仏像がありました。

その仏像の光と、おりから東の方から昇りはじめた朝日の光とが、いっしょになって、それはそれは美しく照り輝いておりました。

一光老人が驚いたのは、申すまでもありません。

一光老人はたいそう感激して、その場所にお堂を建て、その仏像を安置し大切におまつりしました。それが、今の延命地蔵様だったのです。

松の本のお守りとして、村人の信仰を集め、遠くから多くの人びとのお参りが、あとをたたなかつたということなのです。

その後、何度かお堂は、建て替えられましたが、貞亨四年今から三百年位前のこと、黒田のお殿様が、このあたりに鴨狩りに来られて、松の本で休憩されました。

ひどく荒れ果てたお堂の様子をごらんになり、立派に改築されたと伝えられています。

三十年位前までは、お堂の前の松の大本は残っておりましたが、現在は枯れてしまい、その株跡だけが昔を留めています。その後、地蔵庵の七百年祭が、地元の人達によって盛大に催され、「松の本」や「地蔵下」の地名は今も大切に受けつがれています。

四話

神盗人

(広 渡)

むかし、むかしの遠賀平野は一面の葦や菰のおいしげった水溜りの土地で、「ムタ」という言葉そのものでありました。

もちろん、遠賀川も現在のような川ではなくて、「そのムタ」の中をくねくねと曲りくねって、右に左に自由に流れていたころのおはなしです。

広渡と立屋敷は同じ村であったころのことで、広渡の枝村と呼ばれる立屋敷に立派な氏神様が祀ってありました。

その頃の農村ではお祭りがたくさんあって、春は農業を始める「初祭り」、夏は田植えが終わると「さなぶり」、という祭り、秋は台風にそなえて「風止め祭り」、それから一年の終りの収穫感謝の「お宮座祭り」、などがあり、お祭りが、ある毎に広渡の人たちは、沼田の中の曲がりくねった小径を、ぬかるみをさけながらお宮にお参りしておりました。

楽しみにしているお宮にお参りするのがとても大変なので、広渡の人たちは「近くにお宮があったらなあ。」と、話し合っていたある年の「お宮座祭り」も近い頃のことです。

広渡の一人の若者が、闇夜をねらって、立屋敷のお宮のご神体をひそかに盗みだし、広い菰の中の道



歩いて見ようおはなしのふる里



八剣神社大鳥居と参道



八剣神社本殿



●広渡公民館より歩いて5分

を大急ぎで広渡へと引き返していきました。

やがて、立屋敷のお宮の方でも「ご神体」をとられたことに気づいて、大さわぎになりました。「そう言えば、日暮れ時から広渡の若いもんがお宮のまわりば、そうついちよたぞー。」

「そげん、そげん、どうもそいつがあやしかぞ。」

「みんなで手わけしち、探しち、とりもどさんば——。」

集ってきた大勢の人たちが、若者の後を追って、真つ暗な道を追いかけていきます。追われる方は一人ですが、「ご神体」の重さと足元の悪い道のこと、なかなか思うように走れません。それでもつかまっでは大変なので一生懸命に逃げますが、追手はどんどん近づいてきます。

そこで若者は、心の中で念じて「しばらくの間、しんぼうしち下さい。」と大切なご神体を菰の中にかくして、逃げて帰りました。追手は、しばらくそこら中を探しましたが、とうとうあきらめて引き上げていきました。

あくる朝、若者はおそろおそろ昨夜の菰の原においてきた「ご神体」をさがしに出かけました。広い菰の中をあちらこちら探してまわり、やつとのことで「ご神体」を見つけたすことができました。幸いなことに「ご神体」は少しの傷もなく、立派なお姿でしたが、菰の根元の泥と、菰の根にできる「菰黒」(ゴモの実)のため真黒に汚れていました。

しかし、「菰黒」で汚れていたため、「ご神体」が人目にもつかず、無事だったわけです。

広渡の人たちは、それは神様のお護りであると信じ、それから後は、毎年「お宮座」のお祭りには、「菰黒」を採って、神棚に供え、宮座の膳に供えることにしました。

そして翌年の「お宮座」まで一年の間、「菰黒」を家の神棚にかけ、一家の安全を祈ることにしたのでした。この祭りは今でも続けられています。

五話

行満寺の秘仏さま

(別府)

別府の行満寺には昔から大切にまつりされている、木彫りの仏像があります。この仏像はたいへん由緒のあるもので、唐(今の中国)に渡って修業をかさねた有名なお坊さんが、ありがたい仏様のお姿を写して持ち帰り、それをもとに長い時間をかけて彫った木仏さまです。

この木仏さまは信仰を深めれば深めるほどそのご利益があらたかということで、平景清が守り本尊として、戦場にある時も、いつもはだみはなさず大切に持っていたと伝えられています。

寿永の秋、平氏が壇の浦の戦いで敗れてから、景清は九州各地を流れ流れて、薩摩の国(今の鹿児島)でおちつき暮らすことになりました。

もちろん、木仏さまは、どんなに大変なときでも、手ばなすことなく大切にまつりしておりました。

そして、この木仏さまの役得をあ

ちらこちらに広めてたくさんの人々をおたすけしておりました。

いまでも、目の病気にごりやくがあるといい伝えられています。

宮崎県の生目神社もその一つといわれております。

その後、景清がなくなり、その子孫が木仏さまの教えを伝え広めていきましたが、島津義久のころ、仏



歩いて見ようおはなしのふる里



行満寺の全景



大いちょうの木



●県道遠賀線より歩いて3分

教のおしえのことで彼らが薩摩の国を追われることとなりました。彼らは、はるばると九州の北のはし、遠賀の里に移り住んだと言われています。そして、この地にお寺が建てられるという話は、人から人へと伝えられ、「この仏さまに助けていただいたものです。どうぞこれを使って下さい。」と、はるばる遠い村々からも寄付をもって来る人がおりました。それからほどなくして、そのありがたい木仏さまをおまつりするために別府にお寺が建てられました。そのお寺の名前を行満寺とし、木仏さまを秘仏として、いまでも厨子の奥深くに祀っています。それから何年かたったのち、二世の住職浄安師は、「この寺にぜひとも親鸞上人さまのお姿が欲しいものです。」と念じておりました。しかし、お寺は貧乏なものですからどうしてもそれを手に入れることができませんでした。ところが、ある夜のことです。浄安師が寝ておりますと、夢の中に木仏さまがあらわれてこういわれました。「おまえが望んでいるお上人さまのお姿を買うだけのお金は、境内の銀杏の樹の上にあるので、それをつかいなさい。」

夢からさめた浄安師はいそいで起きあがり、境内の銀杏の樹まで一目散に走りまわりました。するとどうでしょう、見上げる銀杏の樹は、目にもまぶしいほどに明るく光り輝いておりました。さっそく、樹に登って見てみると、素焼きの注子の中に銀があふれるように入っているではありませんか。その銀のおかげで、長い間の念願でありましたお上人さまのお姿をやつとのことです。買求めることができました。村の人達は、木仏さまの思いに感激し、それからなお一層信仰を重ねてゆきました。その時の注子や油瓶などは、行満寺の宝物として大切に保存されており、夢に出てきた銀杏の樹も中途から一度焼けたような形になっておりますが、いまでも大空に向かって元気に立っております。

六話

底井野姥さん

(虫生津)

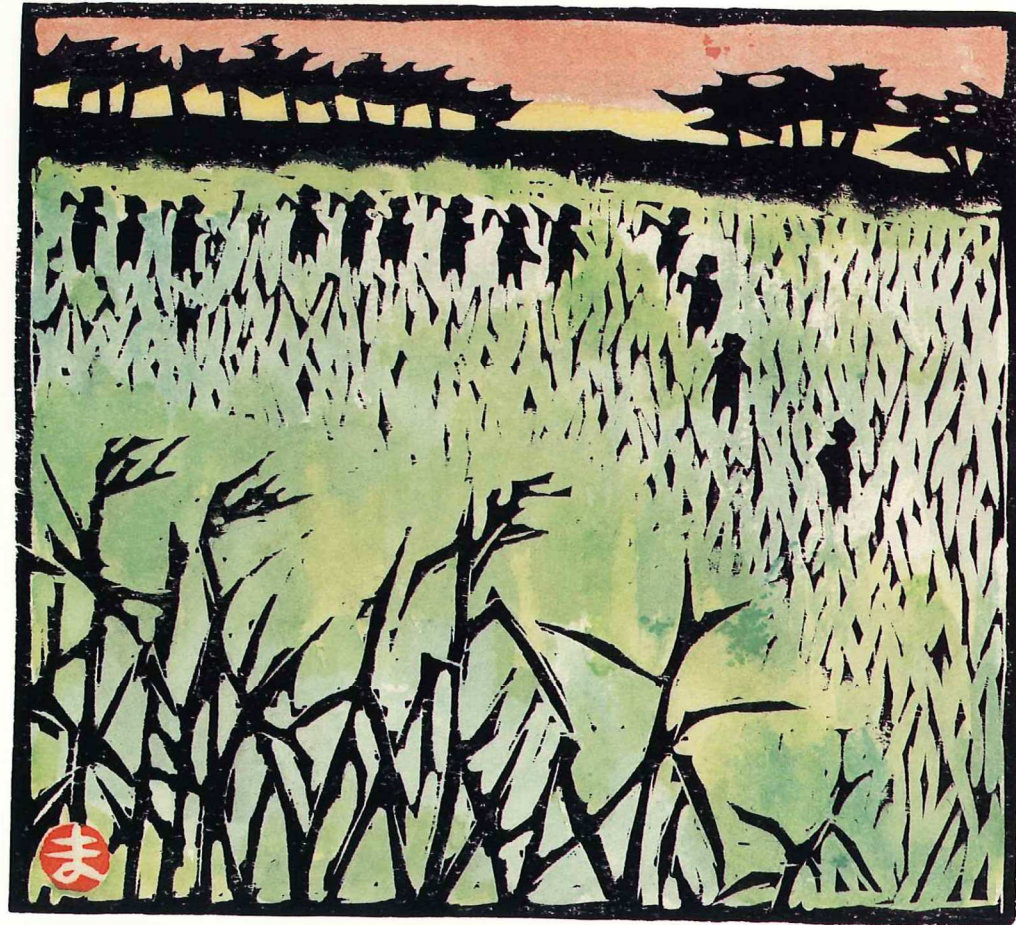
このお話は、底井野の上、中、下(浅木)と虫生津、それに木守の五つの里がまだ一緒だった頃のことです。

田や畑を開こうと思えばどこまでも開くことが出来るほど、ひろいひろい葭の原つばが広がっております。

この村にとっても頭のよい元気ものおばあさんが住んでおりました。おじいさんは何年か前に死んでしまい、のこされたおばあさんがたった一人で大勢の人達を雇って田や畑でやさいやお米などを作っております。人々の中には、いろいろな人がいて、おばあさんが思っているようにはなかなか働いてはくれません。そこでおばあさんは知恵をしょうりました。

まず、田を耕すとき、要領のよい人は土がやわらかくて、近いところばかりを耕します。おばあさんは一番遠いところに酒樽をドンとすえました。そこまで耕していくとお酒を飲むことができるのです。みんなは喜んで耕していききました。

また、刈った草を束ねて荷物にして、おうこ(竹の両はしをするどくがらした棒)と呼ばれる棒でかついで帰るのですが、要領のよい人は、ほんとうは前と後に二つの束を掛けるところを、一つずつし



か、かついで帰ってまいりません。これでは一向に能率はあがりません。

そこで、おばあさんは知恵をしまりました。

まず、家の前に溝を掘り、細い板を渡しました。こうすると、おうこの両端に一束ずつ下げないと、細い板の上をなかなか渡ることができません。刈草の荷はこうして倍運べるようになりました。

また、こんな知恵もありました。

夕方お腹をすかして帰ってくる人達のために、碎米で作ったシトギモチ（糠のついたままの米をひいて団子にしたもの）という餅を出しました。その餅を自分の使った鍬でそいで食べるようにしていました。帰りに鍬をよく洗わない人はその餅にありつけません。あくる日からは皆、鍬をきれいに洗ってから、喜んでお餅をいただくようになりました。

ある日、おばあさんはあちらこちらに、こんなことをいいふらしてまわりました。

「もうこの世がいやになってしまおうた。わたしや天に登りますばい。」

そしてひろいひろい葭の原っぱのまん中に、高いやぐらを組みました。その日はどんよりと曇った日でしたが、おばあさんの天登りをひとめ見ようと、あちらこちらから大勢の人達がどんどん集まって来ました。いまかいまかとまっていると、おばあさんは

「きようは天気が悪いので、天登りは出来ませんばい。」

といってやめてしまいました。そしてまたある日、同じことをくり返し、とうとうそのあたりの葭の原っぱは見物の人々が踏み固めてしまい、立派な田になったということです。

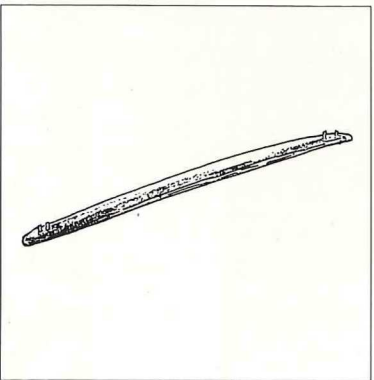
こんなこと、あんなことがたくさんあって、おばあさんはその後も農業に精を出し、女軍師とまで言われるようになりました。そして虫生津の地でその一生を終えたということです。

おばあさんのお墓は虫生津の工場団地を造るときにこわされてしまつて、いまでは残念なことになくなつてしまつたそうです。

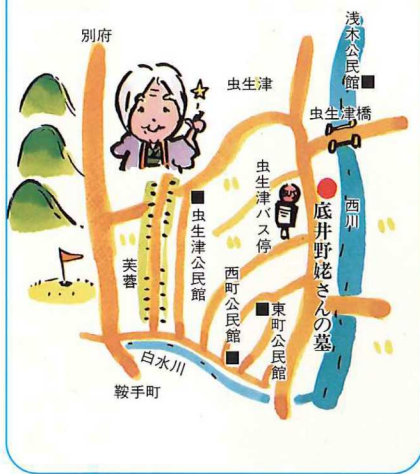
歩いて見ようおはなしのふる里



現在の虫生津のバス停



両端に荷を下げて運んだオーコ



七話

一夜で咲いた菜の花畑

(広渡)

広渡にある八剣神社は、そのむかし、遠賀川の向う岸の立屋敷から分神された神様でした。

村人達は毎朝このお社におまいりするのがならわしとなっておりました。古くなってしまったお社を見て、「早いとこ修繕せんば、ならんなあ。」と、いつておりました。

ある年の春のことです。二、三日前からの大雨で遠賀川の水かさがどんどん増して、いまにも堤が切れそうになりました。村人達はお社に集まって来て、大切にしているお社が流されてしまったは大変だと、心配で夜も眠らず守っておりました。

みんなの願いが通じたのか、次の日は雨もやみ、からりと晴れわたりました。しかし川原の中には上流から流されてきた色々なものが流れていております。

「あつ、檜丸太だ」

「これはきつと神様のお恵だ。この材木で古くなったお社を建て直そう。」

村の人達は皆でその流れ着いた丸太をのこらず全部川岸へ引き上げてしまいました。しかし、村の長老はこういいました。

「流れ着いた材木は、上流のものだから、きつとお役人が調らべに来るはずじゃ。」



歩いて見ようおはなしのふる里



現在の八剣神社



一面の菜の花



「しかし、なんとしても、この檜丸太がほしいもんじゃなあ。」
そこで村の人達は、いろいろと話し合い、考えたことは、近くの畑を堀って、そこに丸太を一本のこらず埋めてしまうことでした。男も女も、老人も子供も、村中総出で働き、その日のうちにどうにか埋めてしまうことができました。けれども、その畑は、誰の目にもすぐにはわかってしまうような新しい土の色をしていたのです。その時です。どこから来たのか見知らぬ顔の美しい娘さんが、
「そこに菜を植えてはどうでしょうか。」
と言いました。それはいい思いつきだとばかりに、村の人達はまた総出で、畑から抜いたとわからないように少しづつ菜の苗を移し植え、りっぱな菜畑に変えてしまいました。
「どうか丸太が見つかりませぬように。」
「どうか無事にお社が建て替えられますように。」村の人達は八剣神社に祈りました。
その次の日も、雲一つないよいお天気でした。うららかな陽の光を浴びて、この前の大雨など、うそのような美しい村の景色です。そして、長老がいつていた通り、馬に乗ったお役人達がやって来ました。
「檜の丸太が流れてはこなかったか調べにまいった。」
役人達は村じゅう見てまわりました。あの丸太を埋めた畑はどうなっているでしょう。村の人達も心配して、役人の後からついてまわりました。
その畑は、なんと一夜のうちに黄金色の菜の花畑に変わっていたのです。
「おうー。なんとりっぱな菜畑じゃ。この村の者達は働き者じゃのう。」
そういいながら、役人達はなにも見つけることなく通り過ぎて行きました。ほどなくして、それはりっぱな八剣神社が建てられたということです。
村では、この日を、毎年万年願として、お祭りをするようになりました。

八話

せんげんがわ 千間川の河童

(今古賀)

むかしむかし、今古賀の千間川に、河童の親子が住んでおりました。

いたずらものの子河童は、いつも元気に堤や草むらで遊んでいました。

その日は、からりと晴れた上天気で、空には一点の雲もなく、川は美しく流れていました。そのうち、子河童は岸辺の砂っ原にあり、村の人達がりっぱに育てたキュウリやそら豆を全部食べてしまいました。

ちようどそこに、子供達が通りかかり、それを見た子河童は

「ちよつといたずらしてやろうかと、川の中から子供達に向けてピューツ、ピューツと水を吹きかけました。子供達も負けてはいません。

川の中に飛び込み、子河童をつかまえ、川岸まで引き上げました。

「河童は陸にあがると弱い。」といわれていますが、そのとおりです。どうすることも出来ません。子供達は、子河童をぐるぐる巻きにし、子河童の大事な腕が、今にも折れそうになってしまいました。

子河童は、ワーン、ワーンと泣きながら

「もう悪いことはせんけ、ゆるしてくれ。」

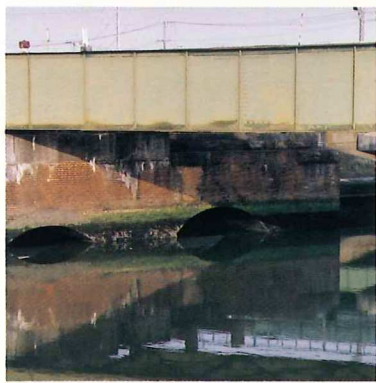
と、なんどもたんでみましたが、子供達はなかなか許してくれませんでした。



歩いて見ようおはなしのふる里



千間、は見わたせるといわれた千間川



今は廃線になった室木線の赤練瓦の橋脚



ちようどそこに、畑^{はたけ}帰^{かえ}りのおじいさんが通りかかりました。

「これこれ、もうそのぐらいでかんべんしてやったらどうじゃね。」

あまりにかわいそうなので子供達の手から河童をはなして、川にかえしてやりました。子河童はおじいさんになんべんも頭をピヨコピヨコとさげながら、親河童のいる深みに姿^{すがた}を消しました。

それから何日かたったある日のこと、おじいさんが同じ道を通っていると、川の中から、この間、助けてやった子河童と親河童が浮^うき上^あがってきました。

「おじいさん、おじいさん、この間は、子河童を助けていただき、ありがとうございます。おかげさまで子河童も元気になりました。」子河童はおじいさんに右腕^{みぎうで}を見せました。

「それはよかった、よかった。もういたずらするんじゃないぞ。」

「あれから、河童の病院^{びやういん}で、そつこい^{そつこい}という薬^{くすり}をつけてもらい、おかげでどうにか元のような腕^{うで}になりました。」

昔から、河童は強い右腕^{みぎうで}を長くのばして魚を採^とったり、いたずら子供の尻^{しり}をぬく、といつて、右腕^{みぎうで}はとても大切なものでした。

「これは助けていただいたお礼^{れい}です。」

と、いつてそら豆^{たね}の種^{たね}を差し出しました。そして、おじいさんがその種^{たね}を畑^{はたけ}にまくと、それはそれは沢^{たく}山のそら豆^{たね}ができました。そのそら豆^{たね}をもっておじいさんは村の人達に配^{くば}って回^{まわ}りました。

「これは千間^{せんげん}川の河童^{かどう}にもらったそら豆^{たね}です。もう悪^{あく}さはせんというとりましますけんどうぞ河童^{かどう}をかわいがってつかっさい。」と、あやまってまわりました。

千間川の河童はそれから二度と悪^{あく}さはしなかつたそうです。

このお話にでてくる千間川というのは、いまの西川のことです。

九話

今古賀の義人

(今古賀)

このおはなしは、今から三百二十年も昔に、ほんとうにあった悲しいおはなしです。

寛文三年、遠賀の今古賀での出来事です。

その年は、二年続きの日照りによる凶作のため、どの家も十分に食べるだけの米や野菜が、ほとんどありませんでした。

そのために、村人達はどうしても年貢を納めることができずに困り果てていました。

「田んぼも、畑もまったくお米ができません。どうか年貢をお許しください。」とお上に申し出をすることを、皆で相談して決めました。

そういうわけで、お役人がお調べのために、村に、やって来るようになりました。

この村の中で、一束の稲も見つかっては、大変なことになりますので苦心して、わずかばかりの稲をかかすことになりました。

いよいよ、そのお役人がやって来る日になりました。

村人達は、皆びくびくしていました。

役人達は、家の中や土蔵の中、いなやの中と、すみずみまで調べてまわりましたが、そこには、一束



歩いて見ようおはなしのふる里



義人2人をたたえる碑



宝樹庵別名中ノ堂の境内にある義人碑



● 県道遠賀線より歩いて3分

の稲も見つかりませんでした。

田んぼはどこも不作で、稲株どころか草も見えないほどの凶作でした。

しかし、最後に見てまわった土手ぞいの畑の中で、少しばかりの刈り株を見つけられてしまいました。

これは陸稲といって、むかしは、田んぼだけでなく、畑にも稲を植えて、洪水などの時の食糧として備えたものでした。

お調の役人達は、これを見て、おおいに怒って、引きあげていきました。

これでは、年貢を許してもらえるところではありません、大変なことになってしまいました。

そこで、村の人達が集まり、話し合って、代表として、組頭の柴田次左衛門、林総右衛門の二人が役人をおいかけて行くことになり、ようやく、宗像まで行った時に、追いつくことができました。

そうして、二人は、お役人に、何度も何度も、許してもらおうと、あやまりましたが、聞き入れてはもらえませんでした。

この時二人は、どんな思いをしたのでしょうか。その上に、村を代表した二人は、無惨にも、打ち首にされてしまいました。

どんなにか、残念な思いを残していったことでしょう。

この話を知った村人達は、つらく悲しい気持ちになりました。

そこで、村人達は、この二人の勇敢な心と、村の犠牲になったその労苦をとむらうために、義人碑を建て、今日に至るまで、その日には心のこもった供養がなされているということです。

その義人碑は、今古賀の宝樹庵というお寺にあります。一度みなさんも、たずねてみてはいかがですか。昔の人の気持ちが伝わってくることでしょう。

今からちょうど二百年前の寛政六年のことです。遠賀地方は、近年にない日照りが続いています。

前の年は大水害がありました。そのため、蝗の大発生や稲の病気などで稲作は、ほとんど全滅に近い状態でした。

それでも、領主様への上納米は、例年通り取りたてられますので、お百姓さん達の暮しは苦しさを増すばかりです。

その頃は、遠賀川の洪水などや、治水が悪いことなどで、島門や浅木地方では、三年に一度位しか収穫できないうようなありさまでした。

その上に、色々な決め事がありました。たとえば、雨の日は筵何枚、夜なべで縄何尋作ること（一尋は両手を左右にのばした長さ）とか、これに従わない人には、きびしいお仕置きがありました。

ある村では、庄屋以下の人がみんな夜逃げしたこともありました。

そんな状態でも村役人に訴えることはできませんでした。

お殿様に直訴すれば、打ち首にされ



歩いて見ようおはなしのふる里



畑生半一氏宅庭の地藏堂



おまつりされている地藏菩薩さま



るとい時代でした。

尾崎村の庄屋徳七には、おきよさんという母親がいました。おきよさんは、大変しつかりした人で、近くの村々のうわさやお百姓さんの暮らしの苦しさをみるに忍びず、何かよい考えはないものかと、思案を重ねておりましたところ、たまたま藩主の黒田のお殿様が遠賀の地を通られるのを知り、ある決心をしました。

その日は、数日前からのもどり寒で、道は凍りつき冷たい風が海の方から吹きつけてくる大変寒い日でした。長井原附近をえらんで、おきよさんは道の端に座り込み、お殿様の通られるのをじっと待っておりました。寒さは一段ときびしさを増し、時々、風に混って白い雪も吹きつけ眼の前を暗くするようでした。やがて芦屋の方からお殿様の行列が近づいてきました。

おきよさんは、「お願いです。お願いです。お殿様をお願いします。何とぞこれをお読み下さい。」と、一通の訴状を手に、お殿様のおかごに向って飛び出していきました。驚いた家来たちは、たちまち訴人のおきよさんを捕えました。

お殿様は、一身をなげだして死を覚悟した老母の心中を思い、直訴の内容を調査するように命じました。とはいえ、刑をまぬがれるわけにはいきません。もとより刑は承知のおきよさんでしたから、動くこともなく落ち着いて刑に服したということです。でも当時は村人たちの犠牲になって刑を受けたおきよさんのお申いをするのも、お墓を作ることすら許されませんでした。

時はうつり、明治になってから村人達は相談して、屋敷の中に地藏菩薩さまの像を建て、おきよさんの霊を慰め申いをしました。

以来、毎年八月二十三日の地藏盆には近くの村々から大勢の人達が出て、お地藏さまの前で盆踊りをし、おきよさんの供養を続け、感謝の心を表わしていたということです。

十一話

竜神の渎りゅうじん ふち

(木守)

むかし、むかしのそのむかし、今の西川が遠賀川の支流で、木守の大曲から西の方を巡って、別府の外側を通り、白賀宮前、木垂と流れて、鬼津の井手を通り、遠賀川に注いでいたころのお話です。

それぞれの村々では、川に井手（水をせき止めるところ）を作って、田んぼに水を入れていました。

そして、田植えの季節になると、川の上流から次々に苗を植えて、順々に下流に移ってゆくのが古くからのならわしでした。

ある年のこと、日照りが長く続いて、どこの田んぼも水が足りなくなってきました。

村人達は、毎日毎日、雨が降るのを待っていました。なかなか雨が降りませんでした。困り果てた村人達は、たくさんの藁に火をつけて、「千把焚き」といわれる雨乞いなどをして、神様に祈りました。

それでも、雨はなかなか降ってはくれませんでした。

木守の西に、水神の藪と呼ばれている、静かで青々とした深い渎がありました。そこは干ばつの中でも水のなくなることはないところでした。

ある時、別府の村人達がその下流に井手をかけて、水を少しずつ田んぼに引きいれ始めました。



歩いて見ようおはなしのふる里



木守地区 井手神社



社屋の奥にある水聲の額



ところが、そうなつてくると、水は一滴も下流には流れてゆきません。困ったのは下流の村人達です。

とうとうある夜、上の村人達と下の村人達との間で水げんかが始まりました。

大勢の村人達が手に手に鍬や棒ぎれなどを持って、井手のある水神の藪の淵に集まってきました。迎えうつ村人達も棒ぎれなどを持ち、今にも乱闘になりそうでした。

と、その時、まっ暗な水面に、突然、頭をふり立て、体中から今までに誰れも見なかったことも、聞いたこともないような、まぶしい光を放ちながら、一匹の竜が姿を現わしました。

大勢の村人達は、誰れもかれも、驚きのあまり、乱闘を始めようとしていた事を忘れたかのように、ぼうぜんと立ちつくしておりました。ある者は、手を振り上げたままになつておりました。

この神々しい竜の姿に、息をすることさえ忘れたように、ただただ眼を見はるばかりでした。

そして、いつの間にか、その美しい竜の姿は、青く深い水の底に、すいこまれるように、消えていきましました。するとどうでしょう。竜の涙でしょうか。

不思議な事に、あの待望の雨が、ザーザーと降り始めたのです。

そこにいた全員が、驚き喜んだことは、言うまでもありません。

敵、味方もなく、全員が涙を流しながら、肩を組み、手をたたき、いつまでも、雨の中で喜びに浸っていたそうです。

この不思議なでき事があつてから、村人達のあいだでは、もう、水争いは、なくなりました。

後に村人達は、その淵で竜神の精を見つけ、井手神社のご神体とし、竜神のお祭りを今も続けているのです。

井手神社には「水聲」と書かれた扁額が今もかけられています。



むかし、むかしのことです。

桃ももから生まれた桃太郎ももたろうが、鬼ヶ島おにがしまの鬼どもを退治たいじしてくれたおかげで世よの中なかが静しずまり、人々は皆大喜およろこびしておりました。

ところが、この時全滅ぜんめつしたと思われていた赤と青の鬼が一匹いっぴきづつ、島からこっそり逃げだしていったのです。

「どこかに、よい鬼のすみかはないかな。」

二匹の鬼は、日本中すみかを捜さがしまわっておりました。

そして、遠賀おんがと芦屋あしやの山鹿やまがとの間にある熊罥くまわにの穴あなという地ちの中なか4キロメートルばかりのトンネルを見つけられました。

「これはなかなかいいすみかだ。」

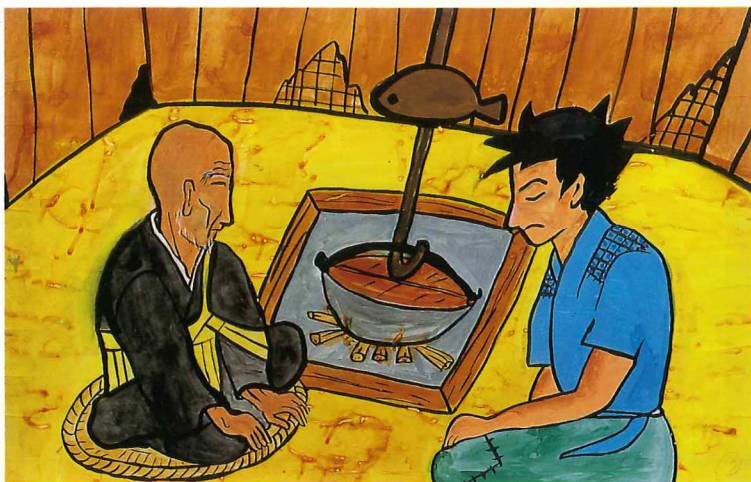
鬼どもは、とうとうここに住すみついでしまったのです。

さて、それからというものが、夜よるになると、鬼どもは穴から出てきて、畑はたけの作物さくもつを荒あらしたり、家いえをこわしたり、人々をおどしたり、いじめたりしました。そのため、村人達の平和へいわなくなりしは一ぺんに地獄じごくのくらしに変わかわってしまいました。

たまりかねた山鹿では、氏神様うじがみさまである狩尾明神かりおみじんに万年願まんねんがんをかけて、鬼どもを退治たいじしてくれるよう皆で祈いのっておりました。この神様は天手力雄命あまのたちからおのみことという力持ちからもちの神様でしたから、人々の願ねがいを聞きいれてくださって、大岩おおいわを持ち上げて、鬼の穴の上うへにすっぽりとかぶせてくれたのです。山鹿の人々は、これで

大安だあん心しんと大喜およろこびいたしました。そして、その場所ばしょを「鬼かぶせ」と名付なづけたのです。そこは、今では「鬼神瀬おにがみせ」と呼ばれています。

ところが、遠賀の方では、山鹿の穴がつぶされたので、よりいっそう鬼どもに荒らされることとなり、村人達は、安心して田畑たはたを耕なすこともできず、夜は早々はやばやと家の戸とを閉め、ひっそりと隠かくれるように暮くさなければならなくなりました。



「鬼どもがいる限り、田んぼにも、畑にも出られんし……。」
「これ以上、この村におつても、このままでは皆飢え死にじや。」

とうとう村人達は、一軒また一軒と、他の村へ移っていき、遠賀の里は、それはそれは荒れ果てた淋しいところとなってしまったのです。

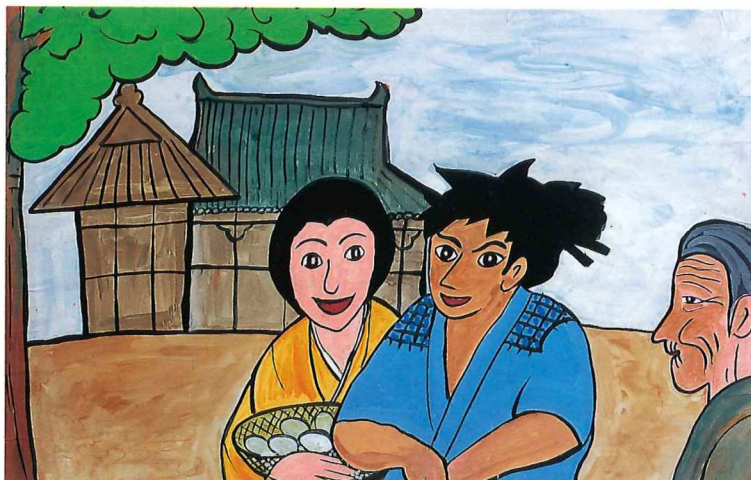
さて、その村には、力丸という一人の若者が、年老いた両親と一緒に住んでおりました。力丸の両親は二人とも寝たきりの病人で、とても他の村へ移ることなどできませんでした。しかたなく、一軒残った力丸は、鬼どものようすをうかがいながらも、かいがいしく働き、心から両親のめんどうをみておりました。

ある日のこと、破れ笠に破れ衣の年老いたお坊さまが錫杖（お坊さんなどが持つて歩く環のついたつえ）の音をかすかにならしながら、西の方から村の中へ入って来られました。そして、荒れ果てた村の様子に心をうたれ、低い声でお経を唱えながら、かなしそうにたたずんでおられました。

しばらくすると、その坊さまは、たった一軒残った力丸の家にあらわれて、一夜の宿をたのまれました。力丸は、喜んで坊さまを家に入れ、貧しいながらも心のこもったおもてなしをいたしました。

やがて、坊さまに尋ねられるままに、村の荒れたもとが、鬼どものせいであることや、両親の病気のため、皆と一緒に村を逃げるができなかったことを、ぼつりぼつりと話しました。その間、目をつむって静かに話を聞いていた坊さまは、一部始終を聞き終えると、

「ほんとうにお困りじゃのう。じゃがな、人の世は悪いことばかり続くものもあるまい。きつと、そのうち闇の中から光がさしてくるであろう。まずは、親ごさんに、柿の葉と猿の腰かけを煎じて飲ませてあげなされ。」



と、おっしゃいました。

そして、坊さまは、次の朝早く旅立たれましたが、別れぎわに、「世話をかけましたな。十日たったら、鬼の穴のところに行つてごらんなされ。」

と、力丸にいいおかれしました。

力丸は、坊さまのおことばどおり、柿の葉をとってきては、せつせと煎じて、両親に飲ませました。が、大木の幹に生えるという猿の腰かけの方は、探しても探しても見つかりませんでした。

そうこうするうちに、はやくも十日がすぎました。

力丸は十日のうちに一体何ができるのだらうかと、不思議に思いながらも、こわごと、鬼の出ってくる穴のところへ出かけました。

「おう！これは、なんとということじゃ！」

驚ろいたことに、穴の入口は小山のように土が盛られ、しかも、その上には、いつのまにか、見上げるような榎の大木が生えているではありませんか。

これなら、さすがの鬼どもも出てこられません。

こうして、最後まで残っていた赤鬼、青鬼は、穴の中に閉じ込められてしまいました。そして、こののち、二度と出てくることはありませんでした。

さて、力丸が、ふと、榎の根元をみますと、そこには、あの坊さまの錫杖が、しっかりと、はまり込んでおりました。しかも、その上には、大きな猿の腰かけが生えているではありませんか。力丸は、榎の根元で手を合わせ、猿の腰かけをありがたくいただいて帰りました。家に帰った力丸は、早速、両親に猿の腰かけと柿の葉と一緒に煎じて飲ませました。そうしているうちに、両親も元気をとりもどし、以前のように、田畑を耕すこともできるようになりました。

歩いて見ようおはなしのふる里



古墳もなくなり畑地に淋しく佇んでいる丸山地蔵



力間口古墳の守り仏 通称丸山様



●力間の畑にある巨石は何かを語ってくれそう！

と、うわさしました。というのは、その頃弘法大師は、お寺に住んで、お経をあげたり、お葬式をするお坊さんとは少し違って、日本国中を旅して回り、いろいろな土地で、困っている人達を助けていらっしやったからです。

ところで、親孝行な力丸の家のあったところは、今では、「力間」という地名で残っています。

そして、鬼どもが出入りしたといわれる熊罥の穴のあった場所は、日本さいごの鬼にちなんで、「鬼津」といわれるようになりました。



その上、働きものの力丸には、気立てのよいお嫁さんもきて、たいそう幸せに暮らしたということです。

さて、遠賀の里では、他の村へ逃げていた村人達が、鬼どもがいなくなったことを伝え聞いておりました。

「力丸のおかげで、鬼どもがいなくなったそうじゃ。」

「ありがたいことじゃ。ありがたいことじゃ。」

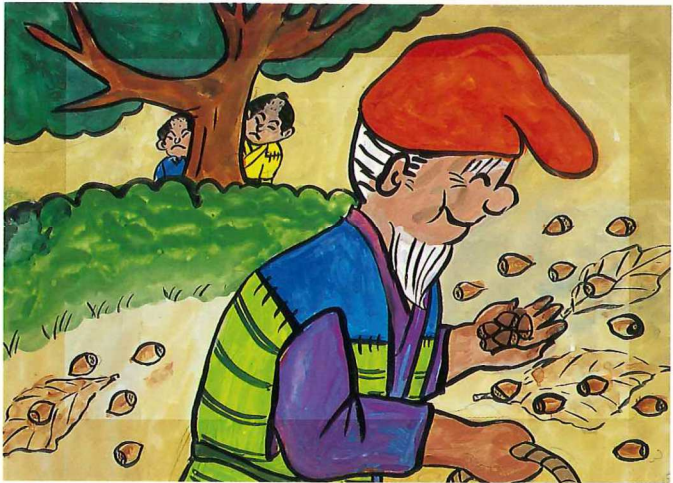
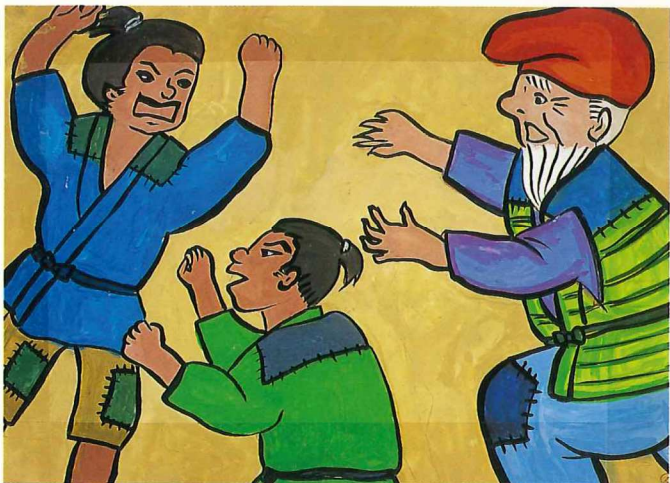
「わしらも、村のことが気がかりじゃったが、これでやっと村に戻れるのう！」

なつかしい村へ戻ってきた村人達は、前よりも一層せいを出して働くようになり、平和でおだやかな暮らしを続けていくことができるようになりました。

又、榎の大木を植えて、鬼どもを退治してくれたあの不思議な坊さまについては、

「あの坊さまは弘法大師、お大師さんにちがいない。」

「そうじゃ、そうじゃ。そうにちがいない。」



むかしむかし遠賀の里の木守村に、「まてじい」とよばれているじいさまがおりました。百才近い村一番の年寄りでしたが、元気で働きものでしたので、殿様からおほめのことばをいただき、ごほうびをちょうだいすることもたびたびでした。

ところで、「まてじい」というあだ名には良い意味と悪い意味の両方がありました。

良い意味はこういうことです。村にもめぐごとがあったり、争いごとがあったりした時、じいさまは、必ず中に入って、「まあて、まあて、ちょっと待てばなにごともうまくいくもんじゃない。」と、いいながら、その場をおさめておりました。そうすると、争っていた人達も気分が落ち着くらしく、よく話し合って仲直りができたということでした。それで、村人達の間では、「まてじい」が来ちゃ、待たずばならねえ。」が合い言葉となり、おかげで木守村は、折り合いのいい村といわれました。「まあて、まあて」というじいさまということで、「まてじい」とよばれたのでした。

一方、悪い方の意味は、こういうことでした。木守村にはどうしたわけか「まてじい」とよばれる実のなる大きな木がたくさんあったのです。じいさまは「まてじい」の実の落ちるころになると、あちこちの庭に入り込んで、「まてじい」をすつかり拾い集めてゆくのです。ですから、「まてじい」のある家々では、いやな顔をするのですが、じいさまは、いっこうにおかまなしです。「拾わせてもらいますで。」と、いいながら、せつせと拾い集めていくので「まてじい」の実を集めるあつかましいじいさまということで「まてじい」とよばれたのでした。

さて、ある年のこと、木守村をはじめ遠賀の里は、大風、大

歩いて見ようおはなしのふる里



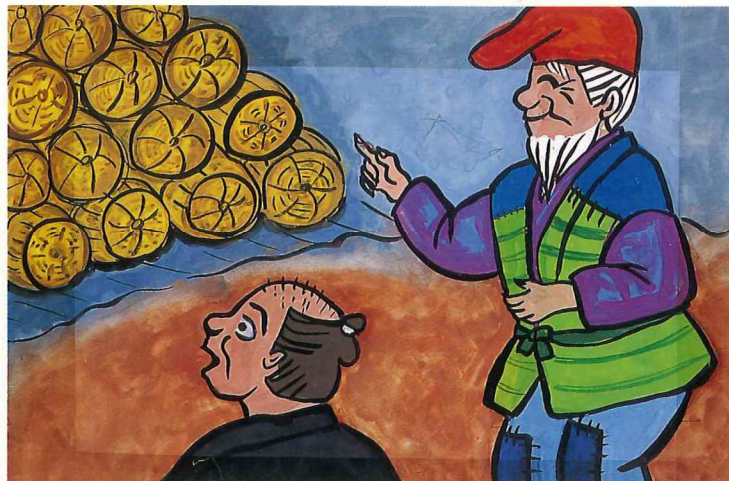
白石氏屋敷に当時の面影が残る、木守の椎の並木



木守神社西側歩いて1分のところにある



●木守神社西方1分白石氏屋敷



雨、洪水とさんざんな目にあい、麦も野菜もそのうえ米も、ほとんどがだめになってしまったのです。日頃から貧しい村人達は、なおさらに困って、食べものを集めるのに必死でしたが、なかなか思うように集まりません。そこで、村人達は庄屋さんの所に集まって、どうしたものかと話し合っていました。良い考えもなく、ほとほと困りはてておりました。ちょうどその時、まてじいの使いの者が、庄屋さんの所に、手紙をもってやって来ました。その手紙には、『庄屋さんに見せたいものがあるんで、急いで、家に来て下され』と、書かれていました。

こんな時になにごとかと思いつつも、じいさまのところに出かけた庄屋さんは、蔵に案内されて、それはそれはびっくりしました。蔵の中には二十俵以上の俵がどおんとつんであったのです。庄屋さんが、「まてじいさん、こりゃなんじゃ。」と、びっくりして尋ねますと、じいさまは、俵の一つをポンとたたいて、「こりゃまてじい」よ。こんなこともあるのかと集めておいたのじゃ。さあ、みんなに分けて下され。」というではありませんか。大喜びした庄屋さんは、さっそく、村人達みんなにわけてやりました。村人達は、じいさまに感謝しながら、「まてじい」を粉にして、団子にしたりして喰いつないだということなのです。

そして、木守村の人々は、「まてじい」のおかげで無事に年を越すこともでき、じいさまは、「まてじい」といわれて村人達から慕われました。

こうして、木守村の家々からは夕げのしたくをするかまどの煙がたえることはなかったということです。



むかしむかし、遠賀の里に小鳥掛という所があったそうなの。そこに、与作どんとおきぬという仲の良い夫婦が住んでおった。今朝も早くから野良で一生けんめい働いておった。

「今日はええおひよりで。」

「ほんにええおひよりで。」

「与作どん、今日もようせいがでるのう。」

与作どんの畑のすぐそばの山に大きな椎の木があったと。お日さまが昇りはじめると、椎の木の長い長い影が尾崎までとどいたんじゃ。そしてな、お日さまが沈みだすと椎の木の長い影が鬼津をすっぽり包んだそうなの。

ある日のこと、与作どんとおきぬは大きな大きな椎の木の根元にある山ん神（山の神）にお参りに行った。

「山ん神さま、どうぞ今年も豊作でありますように。」

「ハガクレ」が悪さをしませんように。」

「ハガクレ」とは、村人をおどろかせたり、田畑を荒らしたり、悪さばかりして恐れられている天狗のことじゃ。

と、その時ガサガサ音がする方に目をやると、

「うひゃ。な、なんだありやあ。」

「ハガクレ」だ。」

「た、た、たすけてくれ。」

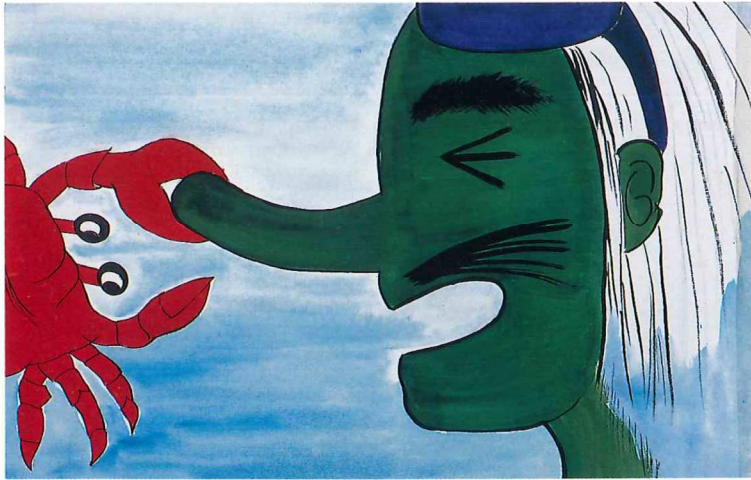
二人は腰を抜かさんばかりに驚いた。

こんもり茂った枝葉の間から、鼻がずんと高く、体が木の葉の色をした天狗がじつとこちらを見ておった。

「ハガクレ」だ!!ハガクレ天狗だ。」

「ワハッハッハ、ああおもしろい、あの驚くかっこうはなんじや。ワッハッハッハ、ワッハッハッハ。ああ、おもしろかった。」





ああ、のどが乾いてきたぞ。そうだ、あの池に行ってみよう。」
と、いうと、天狗はでかけました。

山神からずつとくだった所に、清水のわき出る池があった。
そこには、大きなカニや小さなカニがたくさんおった。

「ゴクゴクゴク、ああうまかった。さあて、もういっちょ人間
ばやらかすとするか。」

と、その時、

「まだ悪さをすつとか。こんどこそ、こらえんぞ。」

どこからか低い声が出た。「ハガクレ」はきよろきよろ見まわ
した。ひよつと下を向くと、真赤な顔をした大きなカニが二本
のハサミを身がまえて、じつと睨んでおった。

「この横着なカニめ。踏みつぶしてくるわ。」

天狗が高足駄でふみつけようとしたとたん、

「バチン。」

「いてえ、いてえ、いてえよお。」

大きなカニが二本のハサミで天狗の自慢の鼻をバチンとはさ
んだと。

天狗がいくら払い落とそうとしてもハサミはビクともしなか
った。仕方なしに、そのままやつと山に帰ってきた。

「いてえ、いてえ、いてえよ。」

「おいどうした。ハガクレ、そのかつこうは。」

「ああ、山神さま、どうぞお助けを。」

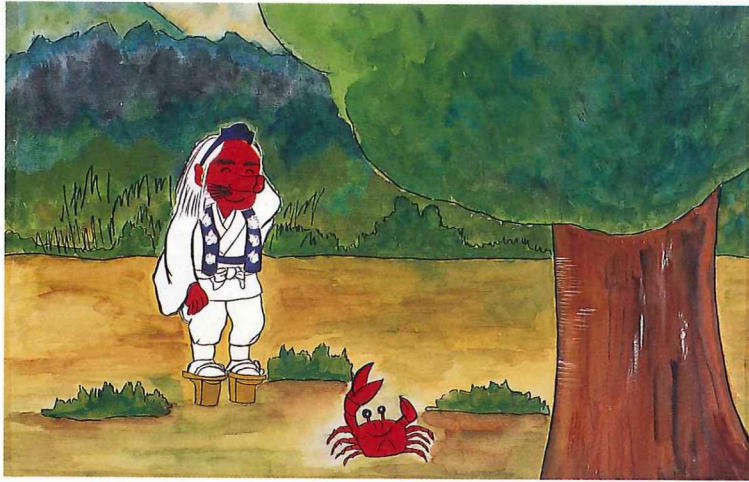
「また悪さをしたな。あれほど悪さをするなといっておいたの
に。おれはもう知らん。」

「もう絶対悪さはしません。どうぞお許しを、いてえ、いてえ、
いてえよ。」

「うんそうか。本当だな。」

「守ります。約束はきつと守ります。」

「約束だぞ……よし……それでは……エイ！」



「カニカニカンニン、カニカンニン。」

カンニンセエセエ、ガニハサミ。

カニカニカンニン、カニカンニン。

カンニンセエセエ、ガニハサミ。」

と、何ともおかしな呪文を二回となえたら、あら不思議。そのとたん、天狗の鼻にくい込んでいたカニの真赤なハサミが、鼻の先をはさんだまま、ぼとりと落ちたそう。

「わーい。とれた！とれたぞ！ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。」

天狗はぺこぺこ頭を下げた。

「今日から悪さができんように、おまえは赤天狗になるのだ。」

「ひゃあ！赤天狗に。」

今まで体中が葉っぱと見わけのつかなかった「ハガクレ」は、たちまち鼻のてっぺんから足のうらまで真赤な天狗になってしまった。

「何だか変な気分になったぞ。」

山ん神の不思議な呪文で、カニのハサミがとれた赤天狗は、うれしそうに茂みの中に入ってしまった。

それからしばらくたったある日のこと、村人達は畑に出て、ビックリしてしまった。

「ひゃあ、これはどうじゃ。」

「一晩で、きれいに畑がすいてある。」

「誰じゃろ。」

「こんなことができるのは、あの「ハガクレ」にちがいない。」

「きつと、あの「ハガクレ」じゃ。」

「このごろじゃ、いたずらせんようになったし。」

「ほんによかことで。」

それから、赤天狗になった「ハガクレ」は時々村人達を喜ばせていたが、いつの間にかその姿を全く見せなくなっても

歩いて見ようおはなしのふる里



小鳥掛にある地主神社



山の神がまつられたという椎の大木



うた。

そんなことがあってから、くる年もくる年も、遠賀の里の小鳥掛は何もかも豊作であった。おかげで、村人達は、だんだん豊かになっていったそう。

「これはきつと、「ハガクレ」のおかげじゃ。」

「そうだ、そうだ。「ハガクレ」のおかげじゃ。」

「ハガクレ天狗ありがとう。」

後になって、この村の庄屋が、「ハガクレ」の働きをありがたく思っていて、赤天狗の面を作ってお宮に奉納したと。村人達は、代々そのお面を大切にまつたということじゃ。

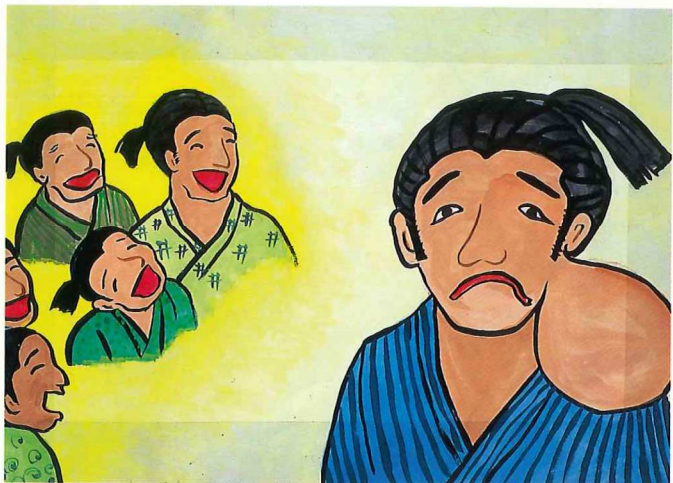
ところが、いつのまにかお宮に奉納された赤天狗のお面の鼻が、だれも知らないうちに欠け落ちておった。それは、カニのハサミで、鼻の欠けた「ハガクレ」そっくりで、村人達は、「鼻かげ面」と、よんだそう。

今でも、鬼津の小鳥掛にある地主神社には、鼻かげ面が大切に保存されているということじゃ。

よんでいたんじゃ。そしてな、ハガクレ天狗が、昔、水飲みにいつて、カニに鼻をはさまれた所を、「ガニハサミ池」と

それを、いつのころからか、「ガニハミ」というようになったそう。

今でも尾崎には「蟹喰」という地名が残っているということじゃ。



むかし、むかしのお話です。
尾崎村の源助さんには、左耳の下のところ、小指のさきぐ
らいのこぶができていました。

はじめのうちは気にもかけていませんでしたが、少しづつ少
しづつ日ましに大きくなっていき、盃ぐらいの大きさになり、
やがては茶碗ほどにもなり、とうとうしまいには、お米の二升
も入っていそうな袋のようになってしまいました。

「どうしようか。どうしたもんかいな。」

お医者どもも、

「わたしには、どうしてやることもでけんなあ。」

近所近辺のお医者どん達も、さじをなげてしまいました。

困りはてた源助さんは、あれこれと考えたあげく、これはも
う「神様にお願ひするしかしかたあるまい。」と、遠賀村のとな
りにある岡垣の高倉神社へ、一年間の願かけをしました。それ
からは、毎朝毎朝、雨の日も風の日も一里(四キロ)の道を、
おもたいこぶをかかえて二股から糠塚、山田から野間を通って、
高倉神社へとお参りしました。

こうして一ヶ月たち、二ヶ月も過ぎましたがさっぱりきき目
がありません。

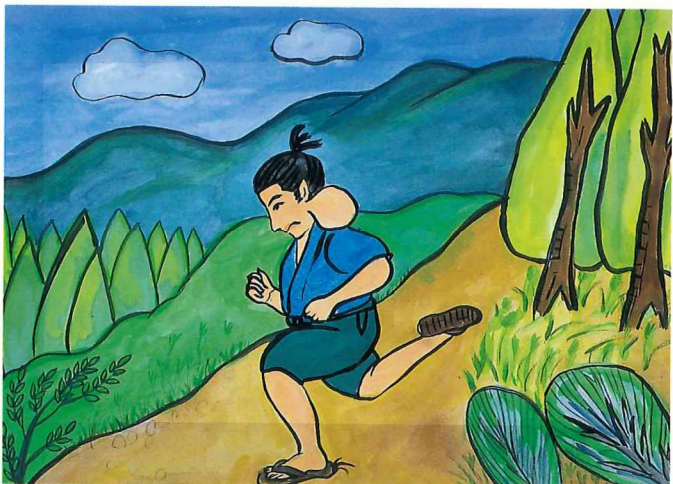
村人たちは同情する人もありましたが、中にはおもしろいか
っこうを見て、笑ひ者にする人もおりました。

「尾崎の源さん、こぶ源さん。今日も高倉、宮まいり。」

二升ぶくろばぶらさげて、中身は水かな、小糠かな。

水なら野間でのましちやれ。ぬかなら糠塚にすてちこい。
いっそ鬼津がよかんべえ。鬼ならこぶは取るちゅうばい。」

やがて八、九ヶ月もたったある晩、源助さんはこぶのとれた



歩いて見ようおはなしのふる里



岡垣への道・県道黒山・広渡線



今の尾崎公民館前



●源助さんが高倉宮に通った道は、今は車がひっきりなしに通っている。

源助さん(げんすけ)に役得(やくとく)をあたましました。源助さん(げんすけ)はここで八十才(はちじゅうさい)を過ぎるまで、元気(げんき)につとめたということです。

あーあ、神様(かみさま)にお礼(れい)をいうのも忘れて(わす)れて。本当(ほんとう)にうれしかったのですね。

その後(ごのち)、源助さん(げんすけ)はお礼(れい)の印(しるし)にと、毎月(毎月)一回(いちど)決(き)まって、高倉神社(たかくらじんじゃ)の広い(ひろい)境内(けいだい)を一人(ひとり)ですみずみまできれいに掃除(そうじ)をする事(こと)にしました。そして、それは何年(なんねん)もつづいたのです。

これを見た高倉神社(たかくらじんじゃ)の神主(かみぬし)さんや高倉村(たかくらむら)の庄屋(しょうや)さんが、いろいろと相談(そうだん)して、お宮(みや)の戸籍帳(こせきちょう)に入れて、源助さん(げんすけ)に役得(やくとく)をあたましました。

て行(い)きました。



夢(ゆめ)を見(み)ました。

しかし、朝(あ)になつて夢(ゆめ)とわかつた時は、ひどくがっかりしてしまいました。それでも氣(き)を取りなおして、いつもの通り(どおり)はやばやお参(ま)りにでかけてお祈(いの)りをすませ、神社(じんじゃ)の前の階段(かひだん)をおりかけたところ何(なん)となく、こぶが冷(ひ)え冷(ひ)えとしてくるではありませんか。

こぶをなでなで手洗鉢(てあらいばち)の所(ところ)までくると、こぶの下(した)の方が破(やぶ)れて水(みず)のようなものが、ザツと、もれだして、たちまちこぶは、ぺしゃんこにつぶれてしまいました。

いやあ、その時の源助さん(げんすけ)の喜(よろこ)びようといったらありません。手をふり、足をふり、ピョンピョンピョンはねながら、「こぶが取(と)れた。こぶが取(と)れた。」

「ありがたや、ありがたや。」と、そこらじゅうを大声(こゑ)でさけびながら、宙(ちゆう)をとぶように帰(かえ)っ

あとがき

この絵本の作成にあたっては、広報掲載の片山武司氏編集の『いいたえ ききつたえ』、中原^{さき}氏創作の『新話十編』、『遠賀町誌』などを参考にさせていただきました。関係各位のご協力を得ましたことを、厚くお礼申し上げます。

遠賀町の昔話をひとつでも多く、皆さんの心に残すことができれば幸いと存じます。

『いいたえ ききつたえ』 『遠賀のむかしばなし』

編集発行——遠賀町教育委員会

遠賀郡遠賀町大字今古賀五一三番地

☎八一一・四三

☎〇九三二二九三・一二三四

版 画——片山正信

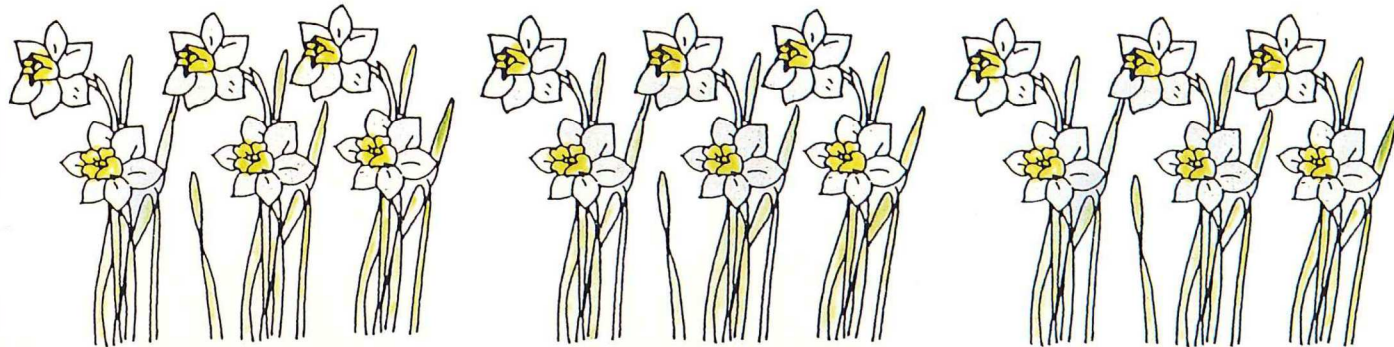
挿 絵——おんがにじの会・青い麦の会

題 字——小川白雲

印刷作 刷——瞬報社写真印刷株式会社

☎〇八三二一(四九)一一〇〇

発行日——平成七年二月



遠賀町民憲章

わたしたちは、農村のゆとりと都市の活力をあ
わせもつ豊かなまちづくりをめざし、次の目標
を定めます。

一、水と緑と伝統を生かし、
文化の香りを高めます

一、ふれあいを大切にし、
明るいまちをつくれます

一、仲間の輪をひろげ、
生活を創り楽しむまちにします

一、みんなで住みたくなる
まちづくりにつとめます



遠賀町教育委員会